

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2277102402		
法人名	有限会社あおば		
事業所名	うるケアホームあおば		
所在地	浜松市北区三方原町70番地の10		
自己評価作成日	令和2年 2月 17日	評価結果市町村受理日	令和2年 4月 15日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigo-kouhyo-shizuoka.jp/kaigosip/Top.do
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	一般社団法人静岡県介護福祉士会
所在地	静岡県静岡市葵区駿府町1-70 静岡県総合社会福祉会館4階
訪問調査日	令和2年 3月 2日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

職員が日常の家事をやってしまうのではなく、生活者である利用者様とともにしていくことを心掛けてきた。そのおかげで、利用者様の介護度の重症化は緩やかである。介護に柔軟に取り組むことで、利用者様自身の満足感が得られ、利用者の反応が職員にも満足感をもたらし、介護の実践が苦しいことではなく、充実した仕事となっているため職員の定着もよく、手厚いケアができています。看取りケアは、開設当初より一貫して実践しており、こちらに関してはそのご家族からのご好評によって口コミで待機者が増えている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所の周辺は住宅が多く、スーパーマーケットやファミリーレストラン、薬局や医院、郵便局等がある。開設から15年が経ち、地域行事への参加や挨拶を交わす関係が出来ている。社会資源を活用して、自分らしい生活をしている。食事作りや片付け、掃除や庭の手入れ等、利用者同士が声を掛け合い主体的に行い、不足部分を職員が支援して、家庭的な雰囲気の中で生活を継続している。利用者の持てる力を理解し、機能を落とさない支援の提供に努めている。日々の変化を見逃さず早めに家族へ連絡し受診しているため、病気の心配はなく、喜びや楽しみのある生活を送ることが出来ている。入浴は、決まった曜日や時間はなく、入浴したい日時に入ることができ、習慣やその人の好みを大切にしている。終末期の意思確認を都度行い、医療や介護・家族が連携を取りながら看取りケアを行っている。また、計画的な職員教育や看取りケアのマニュアルを整備して支援に取り組んでいる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き生きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念の意味を理解し、努力している職員もいる一方、意識していない職員もいる。管理者としては、機会がある都度説明を繰り返している。	時代に即した利用者中心の理念を平成30年に職員全体で作成し、「ちょっと待つて」ではなくその瞬間誠実に応えることに努めている。玄関と各フロアに理念を掲げ、ケア場面で意識づけて具現化を図っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域のとらえ方がこれまでは自治会程度に考えていたが、施設の中にももるのではなく、住民として生活するという視点に立つと、十分に地域と交流できている。	開設から15年が経ち、自治会や地域に理解され、散歩や買い物時の挨拶や地域行事に参加している。スーパーマーケットや野菜の無人販売、図書館の利用、喫茶店や居酒屋に行く等、地域資源を活用して生活を継続している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域と交流することすなわち、そのことが最も認知症の人に理解や支援の方法を地域に発信していくことだと感じている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	会議の開催にあたっては、会の趣旨を理解して企画にあたっている。会議に参加できる職員を交代で増やすことで、ご家族や行政からの要望等をサービスに生かせる視点を持つことができるように努力している。	2ヶ月に1回第2週木曜日に、行政や地域包括支援センター、地域代表や地主、家族や有識者を交え、取り組み状況や身体拘束適正化会議の報告、事案の検討を行っている。提案により出口に街灯を設置した。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	他の事業所と比べると、市役所と地域包括からの運営推進会議への出席も多いため、助言もいただけて大変助かっている。	事業所や地域の情報を積極的に伝え、協力関係を築いている。介護保険の変更ポイントや加算要件、共用型認知症通所介護開設や運営について、また防災情報等様々なことの助言をもらいサービスに生かしている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	内外の研修に積極的に参加し、職場内の研修にも力を入れ、職場内での意識を高めることを心掛けている。	3ヶ月に1回身体拘束適正化会議や身体拘束の有無を自己点検したり、制限をする声掛けには言い換えや代替え案を提案して、拘束しないケアに取り組んでいる。研修を効果的に活用して理解を深めている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待と身体拘束は不適切なケアを軽減していくことに尽きる。そこには職場風土の醸成が欠かせず、職員は職場風土との関係を理解していないが、管理者としては職場風土の醸成に心血を注いでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	制度を活用している利用者が3名おられる。その都度、研修や指導をしている。また外部研修にも出しているが、職員の理解力は低い。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居時の見学から契約にいたるまで、十分に説明している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ご意見投票箱等の設置はしていない。介護の方針や要望等介護主任を中心にご家族の意見を吸い上げ、必要時、面談の設定をしている。	面会時の声掛けやその都度の現状報告、面会が困難な方には受診結果や預かり金の報告時に意見や要望を聞いている。利用者の様子を伝えることで信頼関係を築いている。家族と話し合い要望に応えるよう努めている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員会議を定期開催し、職員の意見を聞いている。また、職員の様子から必要時面接を行っている。	月1回の職員会議や申し送り時に職員の意見や提案を聞いている。日頃の様子や他職員の情報を基に適宜面接を行っている。多くの意見や提案があり、最近では共用型デイサービス利用者の支援方法を変更した。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員個々の自己実現に向けて働きやすい職場環境を整備している。しかし、働く側の意識の低さも時に問題ではないかと感じる。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	積極的に研修に出している。内部研修は、現場に活用できるようにタイムリーにテーマを設定して開催している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	どこの事業所も職員の確保に苦慮している中、交流会を持てる場や、そのような取り組みはできていない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	これまでの在宅生活とかけ離れた生活にならないよう、ご本人の要望に耳を傾け、ケアやケアプランにつなげている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居者本人と、ご家族の要望を聞き、入居後の生活に生かせるように取り組んでいる。(癌が見つかった、外出や外泊の仕方等)		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	居宅介護支援事業所、デイサービスと連携し、その人が望む暮らしができるように努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	掃除や調理、洗濯、お使い等、日常生活の様々なことを、職員と一緒にやる、もしくは利用者が中心になってやるように取り組んでいる。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	生活している場所はグループホームなので、ホーム内のことに関して職員が担い、総合病院の受診・外食・外泊・親族の交流等においては、ご家族に協力いただいている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	これまでも努力してきたが、デイサービス利用から入居になった利用者様の支援を通して、自治会や敬老会や地域の友人様等の関係を切らさない支援を一段と意識するようになった。	老人会や友人の迎えにより、グランドゴルフや居酒屋に行ったり、友人が事業所に遊びに来たりしている。馴染みの床屋や美容院への送迎、神社に初詣や例大祭に行く等、関係が途切れない様に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者の年齢や身体的な状態等に応じて、利用者様がお互いを気づかい、また、楽しく話をして暮らしをしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	こういうケースはほとんどない。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ご本人やご家族からの意見を伺った職員がケアマネに伝え、話し合いの場を設けたり、ケアプランに生かすようにしている。	利用者の日頃の様子に注意して、職員は気持ちを推測しながら対応している。気づきは申し送り等の引継ぎで職員間で共有し、ケアプランに反映させている。1人で喫茶店に行くなど、個人で外出する利用者が3人いる。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	職員は様々な場面で利用者と話しながら情報収集に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	ケアマネが中心ではあるが、心身状態の変化は、介護職員が日々の暮らしの中で観察をしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎年課題に上がるところで、今年は介護福祉士会の出前講座を利用して研修を設けた。職員自身もまだ、力が弱いと自覚している。	日常の様子や状態からモニタリングを行い、申し送り時に確認してプランに反映させている。管理者は情報の伝達が迅速に行われていない事を懸念している。介護計画の見直しは、来訪がある家族には直接確認し、遠方の家族には定期的にFAXで様子を伝えることで納得してもらっている。	情報の伝達が遅れる事で支援に影響する事を考慮し、現場での気付きを迅速に管理者と職員とが共有する方法を早急に検討する事が期待される。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	記録はしているが、モニタリング機能についての理解はできていない。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	理念にもあるように「利用者にとっての今」を大切に柔軟なサービスに努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	自治会のグランドゴルフ、居酒屋への外出、社会福祉協議会の日常生活支援事業の利用、成年後見制度の活用、図書館への外出等を行っている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	病状の悪化を防ぐために早めにご家族へ連絡し、受診につなげている。	定期的な訪問診療はなく、医療機関に予約をして職員の付き添いで受診している。管理者含め看護師が2人いるため、訪問看護は利用していない。専門医に家族が付き添う場合もあるが、1人で受診する利用者もいる。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職員のレベルに差はあるが、その経験や知識の差をカバーするために、毎日リーダーを配置し、リーダーが看護師へ報告するシステムをとっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院中から、介護職員が交代で面会に赴き、情報収集をするとともに、退院について職員・利用者様双方に不安がないように病院スタッフと連絡を密にとっている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に意思の確認を行い、その後の経過中にも必要時、意思の確認を行っている。介護職員としての意見も伝え、看取りに取り組み、ベストを尽くすようにしている。	看取りは行う方針で、入居時に説明を行い確認している。終末期には改めて確認し、医師や家族と話し合い方針を決めている。終末期のケアについては、管理者による事業所内研修やマニュアルを整備して取り組んでいる。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	マニュアルは整備されているが、介護職員の入れ替えりに応じての訓練はできていない。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	防災訓練は定期的に行い、利用者の訓練も身につけてきた。運営推進会議でテーマを取り上げて、皆様の防災に対するご意見を頂戴できている。	居室の入口に、防災頭巾が掛けられている。夜間想定訓練を19時過ぎに実施したことで、実際の台風では利用者が慌てることなく落ち着いて行動していた。備蓄は7日分を用意している。運営推進会議で防災の取組みについて話し合っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	ある新人職員からは「ちょっと勘違いしてました」と発言があったが、「座って」「待って」をきつく言うてしまうこともあり、職員の生育歴等が投影されやすいが、その都度、職員同士で注意をしようとした。	自立している利用者の場合、トイレのドアは閉めて職員はドアの近くで見守っている。本人の意思を尊重し、外出等の無理強いはしていない。プライバシーを損ねる対応や言動に気付いたら、その場で注意している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	外出や買い物等はわかりやすいところであるが、外出が比較的少ない方等に対しても今日着る衣類・入浴後の着替えの衣類等の選択ができる声のかけ方をしていきたい。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	どの方に対してもご希望を伺って入浴時間や外出時間を調整している。また、食事も一律ではなく、遅くなっても対応している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	汚染した衣類をいつまでも着ていないように配慮したい。浴室洗面台に化粧品(乳液や化粧水)を置くようになってから、女性の利用者は気分が変わっておしゃれしようされているように感じる。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	一人一人が活躍できるように、声をかけて役割を任せてもらっている。	管理者が献立を作成し、地元の業者に材料を配達してもらっている。2人の利用者が、職員と一緒に台所に立ち、野菜を洗ったりフライパンで炒め物をしたりしていた。外食には希望者が職員と出掛けたり、個々で家族と出掛けたりしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	水分チェック表を用いて、水分摂取できるように支援している。嗜好品を用いて摂取できるようにしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔ケアは毎食後している。しかし、今後においては3回のうち1回はしっかり時間をかけてケアできるように考えていきたい。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	トイレで排泄をしたほうが利用者也介護者も楽であるから、できる限りトイレ誘導し、トイレで排泄ができるように支援している。	チェック表は個々で管理し、1か月の様子で判断して声掛け誘導をしている。昼間は10人程が布パンツを使用し、夜間は2人が紙オムツを使用している。昼間は利用者全員がトイレで排泄している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日の排便チェックを行い、便秘を増強させないように支援している。内服薬・坐薬などについて、医師に積極的に相談している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	できている。	週に何回でも可能で毎日入浴する利用者は2人いる。平均して2日に1回で、声掛けをして好きな時間に入浴している。シャンプーや石けん、入浴剤は個別で用意している。拒む利用者には声かけを工夫し、入浴に至っている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	寝具の手入れを行い、快眠できるように努力している最中である。寝具に関心がない職員もいるため、もう一歩努力が必要と考える。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬については医師やかかりつけ薬剤師への相談も積極的に行い、支援している。効能については理解して経過の観察ができるが、副作用については忘れがちである。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	全員はできていない。入居者全員が役割と楽しみが持てるようにしていくことは課題である。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	他施設に入居されたご兄弟のことを心配される利用者に対して、ご家族や戦法の施設にも掛け合い、職員が付き添って面会を実現するなど積極的に行っている。糖尿病の方等に対しては、雨天以外は、もっと散歩に出て運動療法も積極的に行っていきたい。	事業所周辺を15分程かけて散歩したり、無人販売のミカンを買ったりしている。外出を好まない利用者もいるので、個々の行きたい場所への外出を優先している。個人で行動する利用者が3人いるが、携帯電話で連絡を取り合っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ご自分でお支払いができるのか、確認の場もあるが、どうしても職員が支払いをしてしまいがちである。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話をすることはご家族が快諾していないと難しい。携帯電話をお持ちの方は自由に使っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	環境の掃除には配慮しているが、清潔不潔の理解が乏しい職員もいるため、もう少し水準を上げていきたい。	居間は1日に2回窓を開けて換気している。玄関に雛人形の七段飾りが飾られていた。利用者の能力に応じて窓ふきやトイレ掃除、モップ掛けなどを職員と一緒に当番制で行っている。管理者は季節の飾り付けが乏しい事を気にかけている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	1人になれる場所について、毎年外部評価の時期に管理者が職員に説明しているが、ほとんど理解(意識)されない。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	好きなタレントの写真が飾ってあっても倒れていたり、配慮できていない。ハード面で居室に棚や押入れがないため、相当に工夫をしないと散らかった部屋になってしまう。	各居室にエアコンと洗面台が設置されている。収納スペースはなく、個々に洋服ハンガーや整理ダンスを置いている。壁にスケート選手の大きな写真を貼り、編み物の作品を置く人がいる。転倒の危険性を考慮して家具を歩行の支えにする等、配置を工夫している利用者もいる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	できる職員もいるが、そうした職員の発信力や指導力が弱く、チームとしては意識が低いと感じている。		